思い出といま

11年卒業　上野裕子

私の母校は六高女夜学校。冬の教室は寒かった。ダルマストーブに、昼の残り火がある時は嬉しかった。三年生になる頃、級友は十三名に減っていた。時にはストーブを囲んでの授業もあり、心まで温まる思いだった。割れたガラスから寒風が吹きこむ。窓に映る先生の白い衿が冷たく眼に残っている。指名されて本を読む、足が震えて椅子がガタガタ音を立てる。

暗い校門を通過するとき幽かに香る沈丁花。春を待つ心に灯がともる。卒業式も間近い。

卒業してからの六十年。臆病ながらの好奇心と学業への欲求不満を燻らせながら生きてきたように思う。

人のために役立つような知識はないけれど、耳が聞こえ、口がきけることで役立つならばと、手話を習った。始めてみて、そんな生易しいものではないことを知ってたじろいだ。

相手の手話と心を正しく読み、それを間違いなく伝える技術、深い人間性を求められるのだ。

今さら他に道も求められず、ライフワークと決めて行けるところまで行こうと努力中、命あるうちにはむずかしいかもしれないけれど……。

むかしと今

思い出(?)

14年卒業　森下いよ子

私が通学いたしましたのは六高女夜学校でした。貯金局はその頃狸穴にありました。振替貯金課から毎夜遅刻をして通学いたしました。出席日数がぎりぎりで眞田先生に卒業させていただきました。いつもいつもお腹はすきっぱらでねむくて居眠りばかりしていましたが松田先生にあこがれたりしました。今は緩和ケア病棟（ガンホスピス）で静かな毎日を送っています。若いハンサムな先生方に又看護婦さんのやさしい行き届いた介護を受けて一生の中で一番良い時を過ごしていると思っています。

思い出ずるままに

19年卒業　升谷津喜子

戦後五十年と云う節目に、計らずも母校の、「おせんち山」欄に一筆投じさせて頂いました。思い出ずるままにと申しましたが、書き出しましたら「おせんち山」は何メートルありますか、それこそ山程一杯あり、大変ですので大分しぼりました。

昭和十九年卒業後、父の生家である岩手県一関に疎開しまして早や五十一年、住めば都、かっては東北のチベットなどと云われておりましたが山川あり買物は駅近く病院多く、まことに便利で快適に暮らしております。ささやかな幸せとも申しましょうか年を経るにつれ面倒な事からは離れつつあり我が身の安全は人のためとも思い健康に気をつけ、自然に親しみ、洗心高女在学当時のよく学びの培われた精神を、目下「源氏物語」古典学にのめり込んでおります。健康のため「詩吟」、人との交流のため「カラオケ」等、時にはボランティアのお便りチームに入り一人暮らしの方々にハガキを書いております。過ぎし日、昼働き、夜勉強した経験は、私にとっては誇りとも思い、年一回のクラス会が何より心の糧となっております。

以上

兵庫県南部地震に遭遇して

34年卒業　土田　京子（旧姓重村）

一九九五年一月十七日午前五時四十六分五十二秒、ゴオーという地響きと共に、上下左右に揺れ始め、家具の倒れる壮絶な音に、何が起きたのだろうという現状を把握出来ぬまま過ぎた四十七秒。電気が消え真っ暗になった部屋の中で、暫くの間は息をひそめ、その後ローソクの灯りを頼りに部屋の中の様子を見ると、本ダンス以外のものは、全部倒れ壁に亀裂が入り、柱のコンクリートは顔を出し、見るも無残な状態でした。六時半すぎ東の空が、白みはじめる頃、玄関まで行き開けたマンションの鉄のドアーが外に向けてはずれ、表に飛び出した時、近所の家々が、倒れ傾き、すぐ近くの四階建てのビルが、三階になり、今にも倒壊しそうな状態で電線は手の届く程に緩み、強烈なガスの匂いに、呆然としました。

西宮市の中でも、私の住んでいる甲子園地区は意外と早く午前七時半過ぎには、電気がつきました。それから、テレビで入ってくるニュースに、釘づけになり、少しずつ状況が分かるにつれこの重大さに身の縮む思いがしました。高速道路が、切断され今にもバスが落ちそうになっていた場所も我が家の近く、駅の近くのマンションが倒壊し二十数名の生き埋めが出たのも家から十分足らずの所、本当に文字ではいい表わせないものが、沢山あります。

震災後の生活がこれ又大変でした。電気は、すぐついたものの、水道は二十日間、ガスは約四十日間復旧せず、現代を生きていくものにとって、ライフラインの重要さを、身を持って思い知らされました。

その中でも、一番嬉しかったのは、沢山の東京の友達から、かかりにくい電話を何度もかけて下さり、励ましの言葉を、いただいたことです。負けそうになる気持ちを、暖かい優しい友の声が、何百倍もの勇気を与えて下さり今に至っています。

又、全国から応援にかけつけて下さった、ボランティアの人達、特に若者のボランティアの人達が、国道二号線を、リュックを背おって東から西へ西へと活動を続けて下さったことに、「今頃の若い者は」とは、絶対に言えないと心から思い、感謝いたしました。

兵庫県に住んで二十数年、関西は地震の少ない所と自他共に認めていましたが、この度の震度七の直下型地震は、本当に生きた心地がしませんでした。今でも度々余震がありますが、悲しい事に、この地震で得た教訓は、地震が起きた後は、決してマニュアル通りには、いかなかったということです。

これから、私達のマンションも補修に一千万円以上かかるという見積りが出ました。補修する間は、九ヶ月間転居しなければなりません。でも負けてはいられません。一月十七日の原点に戻り、怪我もせず命が助かったことに感謝して頑張っていこうと思っています。

バスケット部のこと

35年卒業　津川明子

今年の夏は酷暑の記録が更新される程の暑いなかを來竹桃や百日紅が太陽に負けじと花を咲かせており元気づけられます。その少し前まで咲いていたくちなしの花を私がはじめて知ったのは、三十ン年前のオセンチ山でした。登下校の折、目にしても足を向けることは数えるほどしかなく、二年の夏休みに当時はどこの部も加入していなかった都立定体連に先生方におねがいして加入させて頂きその通知を先輩とオセンチ山で読んでいた時、いい香りがしました。

当時バスケット部は、名簿上は登録しても試合が近づくとまあまあながら普段の練習は出席者は少なく、週二回、月一回日曜、夏期練習は夏休みの一週間毎日を、雨もりこそありませんがフリースローやロングパスを少し高く投げると天井の梁にぶつかったり、ドリブルをしていると床がガタンと抜けたりした体育館で汗を流しました。冬に軽井沢のスケート場へ部員で行き尻もちをついたりコーチの長竹さんの本格的なフィギュアスケートに拍手をしたりしました。練習はつらかったですが一所懸命頑張ったことは今となっては楽しい思い出となっております。